

大峯奥駈道

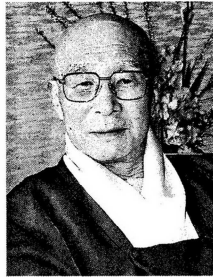
つなぐ志 開く道なき道

世界遺産に生きる

紀伊山地の霊場と参詣道

人が歩かない山道は荒れる。草木は生い茂り、風雨で木は倒れ、誰も寄せ付けない。

紀伊半島の深山に延びる一筋の道、大峯奥駈道。吉野山から県境を越えて熊野へ、1300年前に修験道の開祖、役行者が開いたとされ、平安時代に山伏の修行場となった。聖地・大峰山(山上ヶ岳、1719m)や近畿最高峰の八経ヶ岳(1915m)を通る約90km、踏破に6日はかかる険しい道だ。

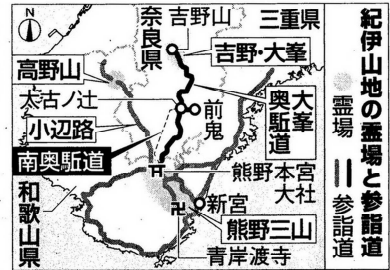


五條順教さん 2006年

だが、修験道は明治政府に弾圧され、奥駈道をゆく

山伏に聞かせた。

初めて奥駈修行をした。吉野山の寺の僧侶になった時だ。「山小屋はぼろぼろ。大雨の中、先輩の山伏が小屋から出て枝を集め、薪を作ってくれた。それも後から続く山伏のためにと、多めに」。そんな話を後輩の

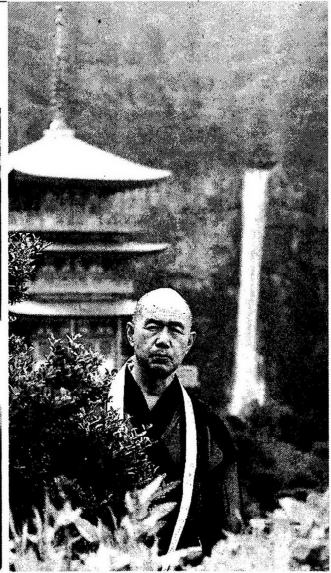


丸太を運ぶ玉岡憲明さん
=2012年、新宮山彦ぐるーぷ提供

45km 山仲間、執念の草刈り

④

高木亮英さん
前田勇一さん
=1974年



吉野山から奥駈道のほぼ中間の「太古ノ辻」まで進んだが、その先の南半分(南奥駈道)、熊野までの45kmは深いやぶだった。どこが道かも分からず、迷い、疲れ果て、やっとたどり着いた。南奥駈道は、その後も人を拒み続けた。

それから30年。南奥駈道の再興を願う男が現れた。和歌山県田辺市出身で鉄工商として財をなした前田勇一さん。熊野信仰に篤く、十年來の病に立ち向かい、79年に山小屋を建てた。だが、2年後、志半ばで亡くなった。

前田さんは晩年、和歌山県新宮市で「新宮山彦ぐるーぷ」という山仲間の団体を設立した玉岡憲明さん(89)と出会う。玉岡さんは元銀行マン。30代で登山に目覚め、冬の穂高の岩登りなど先鋭的に挑んでいた。

「南奥駈道の再興は、その先にある新宮の発展につながる」。前田さんにそう説かれ、情熱に心を打たれた。玉岡さんは決意した。自分自身の「行」として、彼の遺志を継ぐと。84年6月。僧の荒行「千日回峰行」になぞらえて、「千日刈峰行」と銘打ち、背よりも高く茂ったクマザサを刈り始めた。

重たい荷物を背負って山に登り、ブヨやタニに刺されながらの作業だ。弁当も草刈り機の燃料もすべて自腹。47人のメンバーで、道を開くまで足かけ3年、合計315日かかった。

だが、ササはすぐに生え、2巡目、3巡目と刈り続けた。山小屋も新たに建てた。資金集めのため、アルミ缶の回収もした。重労働でも、山仲間がついてきた。昨年代表を引き継いだ元製紙会社員の川島功さん

(73) 三重県紀宝町には言う。「まず自分から動く。そんな姿に引く張られた」。信用金庫の常務だった沖崎吉信さん(66) 新宮市でも「一緒に限界に挑戦し、仕事の悩みも忘れられた」。

南奥駈道が開かれると、山伏が帰ってきた。明治以来途絶えていた熊野修験を復活させたのは、青岸渡寺(和歌山県那智勝浦町)の高木亮英副住職(64)だ。「玉岡さんたちは、我々以上の行をした」。復興した45kmを含む大峯奥駈道は04年、「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部として世界遺産に登録された。

刈峰行を始めて30年。山彦ぐるーぷの活動は、1700回を超えた。だが、いま山に玉岡さんの姿はない。春先に山小屋で体調不良になって一時入院し、少し歩けるまで回復したのはつい先日だ。行は成し遂げた。継いだ遺志は確かに果たした。だから、こう思う。「前田さんは、あの世できっと喜んでいてくれる。玉岡、ようやくたつてね」

世界遺産は、人類が残した貴重な足跡だ。だがそれは、遠い歴史の出来事ばかりではない。今を生きる私たちの物語でもあるのだ。 〓おわり (この連載は筒井次郎が担当しました)